

## 35) 天応穴について

one theory about Tenouketsu

北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部客員研究員 宮川浩也

Kouya MIYAKAWA

### 一、はじめに

腧穴の中で、穴位も無く穴名も無いのものを阿是穴といい、別名を天応穴という。その説の初出と考えられるのが、李梴の『医学入門』（1576 刊）で、「散針者、治雜病而散用某穴、因病之所宜而針之、初不拘于流注也。若夫折傷跌撲、損逆走痛、因其病之所在而針之、雖穴亦罔顧其得與否也。指痛針痛、徐氏謂之天應穴」とあり、天応穴は、「徐氏」が唱えていたことをいう。そこで、「徐氏」とは誰のことか、検討してみた。

### 二、『刺鍼要致』

御園意斎（1557～1616）の弟子の沢庵宗彭（1573～1645）が書いた『刺鍼要致』（1619 成）には、「又不拘經穴、刺病之所在、謂之散鍼、徐氏又謂之天應穴、今時刺者多是散鍼之一法而已」とある。『医学入門』の記載を参考にしたものと思われる。徐氏の天応穴鍼法が、わが国に将来されていたと考えられる。

### 三、『鍼学発蒙訓』

宮脇仲策著の『鍼学発蒙訓』（1714 自序）の「鍼術ノ元由」に、「田代氏三帰回翁ト云ル人アリ、大明ニ入テ徐氏ガ伝ヲ得タリ、聞説、此人南宋徐熙

字秋夫カ後裔、世々胥嗣テ名医ナリ、專鍼術ヲ善ス、扁鵲華陀カ伝ヲ得、十二經穴ニ拘ラズ、腹背ヲ刺ス、効驗神ノ如シ、最省約ニシテ簡要ナル者ナリ」とある。「南宋徐熙字秋夫」とあるのは、一般に「徐氏八世」といわれ、始祖が徐熙であり、秋夫はその子である。よって、「南宋」は南朝の劉宋を指す。宮脇流は、「当流鍼伝道統」に、徐氏から田代三喜（1465～1544）、三喜から助心、助心から宮脇海月、海月から宮脇仲策へと伝わったとある。

### 四、まとめ

以上のことをつなげると、田代三喜が留学期間（1487～1498）に南朝宋の徐熙、徐秋夫の末裔に学び、日本に将来したのが經穴に拘泥しない鍼法ということになる。その鍼法は少なくとも明代まで行われており、ある程度、名が通っていた鍼法であったと想われる。馬玄台の『靈樞註証發微』（1586 刊）の經筋篇には「其所取之愈穴、則痛處是也、俗云、天應穴者、是也」とあるので、あるいは、傍流の鍼法として認識されていたのかも知れない。いずれにしても、李梴が言う「徐氏」とは、徐熙、徐秋夫の末裔を指すと考えられる。